

西宮集小録

三

内外又人の比較
道徳の心や女作
事と道徳つたの聖言
道徳の石代の研究と研究

特別
14
1919
176



○希臘古時の美術趣味を「リッペン」が
ラオコーンを論ずる「あつこ」引用せし左の
ニ三の例を依り大略意味を述べ得べき
歟

一 ナマンテスは古代希臘の畫ニとて著名な
人なり彼んは傑作の一として後人は彼の
トロヤー出征の海を渡る怒りを感めんと
主母アガメムノンの愛せしイフイゲニヤを
血祭の犠牲とせしいと悲境の様を畫
きしこのを特に愛せしは……彼んは血

祭の時の立ち会つる人々の顔をおもひの悲みの顔
を思つて而して父なるアカメムロンが顔のよはは之
を掩ふて見えさうしめぬ言

表しアカメムロンの顔をおもひは悲哀の情面
に溢れ自ら時紅の面をおもひ描き其の醜きまは
えささうあつてさうあつてんごん理おもひの思ふ
さう、こゝは顔をおもひをアカメムロンの顔をおも
ひしえせしめさうあつてんごん理おもひの思ふ
親あつて其の父の因情をおもひせ其の悲哀の面お
もひあつてさうあつてんごん理おもひの思ふ
悲意をおもひせさうあつてんごん理おもひの思ふ

一 古への書の中よりあつてんごん理おもひの思ふ
んごん理おもひの思ふ
ぬ「狂氣のヤツキス」といふ子殺しのメデア
とて彼人の傑作といふ後世の人もあつてんご
んごん理おもひの思ふ
信を推測するも彼は彼人は其の情
面を思ふさうあつてんごん理おもひの思ふ
情面をおもひせさうあつてんごん理おもひの思ふ
を思ひしめし、例へば彼の夫を思ふ
んごん理おもひの思ふ
メデアの因情をメデアから思ふ其の子

を殺す術をも守るが、これのみならず、
以前の彼らの苦子の情と彼らの嫉妬の
念も、尚ほ相聞いつくある術をも描
けり、この所、親しくもこの園を
しと容れ、メテアの決意の終局を推
測し、或る一つ個残酷なる子殺しの
母親をえり、と悲傷し、終め、我
標の或る一つ、即ち親しくも悲傷
の園中、さうして、見ゆる以上、地
す、さうして、此定まらん、と、情
の、まもりの、ゆき、さうして、論



へし……チモマツリスは、巧め、
の手、ある、術、も、彼、の、メ、テ、ア、の、術、を、ま
た、あ、げ、る、の、術、を、ま、た、あ、げ、る、と、せ
し、凡、庸、畫、家、の、み、ま、ら、る、こ、と、を、か
き、し、し、ら、う、と、せ、
一、チ、モ、マ、ツ、リ、ス、が、狂、氣、の、ア、ヤ、ウ、キ、ス、し、も、こ、に
フ、イ、ロ、ス、ト、ラ、ー、ト、(命、脈、の、振、る、あ、る)の、術、を
ハ、彼、ん、の、高、峰、群、を、ま、ら、し、し、牛、羊、を、と
手、も、り、さ、り、と、撲、殺、し、て、狂、暴、を、お、お、し
ま、り、の、如、く、控、え、極、え、ん、が、し、し、技、術、を、ハ
お、お、彼、ん、の、こ、の、烈、し、き、暴、行、を、お、お、

おろろ打ちやするひつ、徐ろる自殺を心
てんとする状を思ひいへ之を畫きしふか
し、さんをおある状能う移けるアヤツキス
こそ言ふ真の狂事あるアヤツキスとしへ
又ゆるさん、何んころん人ほ其の是事の
をえさるも能く其の是事のをえさる
ハろり、海上を移ける暴風の捲物を
之と風やを後、海上を、打ち付けえ
る難破の船體と死屍とを能う見え
るこそ却る能く痛切、悲傷し得
る、さん

○毒師の告白を時傳正の服と着けそ
しと傳へるラオコーンを傳説の反
して技術家う物々裸體とさるる、つぎ
しツレングの糸する所をオオコ
彫刻の別を論じ又裸體の原形を
論する、松元 フーツリテー、しんぶくの
傍らちし

彫刻を繪畫のこころ細くしらぬ地ぢ
質を畫き得る、なき、不便なき、知んをも
着し畫き得る、さすも技術ある、又
一七ラオコーンの右腕を彫刻古こと

うらうらしいさきん 試みる思く奴隷の製心
たる衣服と天神の賜無なる身体とを亂ん
う美うも亂んか美ううさる 曰く藝術
うううあう修画の为うを彫刻も亦之
をわさううへううこの記リやけあう
吾人の心目は藝術の修うも 眩惑せう
んんことを修う 修うも何うう方け
修うも 眩惑せうんん其う國うう
人の関を知らんと修うう所うあう
抑七修う修けう衣服之を掩ハさう
修うも衣服を透して身体を看るう

ううが又精神をも看ることをわう
ウイルギールがウオコーンは危正の衣冠正
しくいかにても修うも何ボの而際う
其う肉體と心けうの苦うをわう
とゆうあうこのあう修うあう
衣服は人の心けを透せぬう
彫刻もあうは修う、彫刻もあう
衣服を修うの味う修けう衣服に
其う刻う修うの修うは人
修うを修うをわう外うあう
とを得、このあう彫刻も修うも内部の精

形を身体に現はんと欲するは、
 属物を放棄せざるを得ず、若しラオユー
 ンに於ては、
 彼らに類する
 ば、之が、ある掩はん、而して、
 内心表出の要部を、
 技術者は、
 り、
 受けん、
 更なる、
 受ける、
 彼らに、
 抑も、
 得ん、
 自家の、
 没却する、
 思ひ



いんや

○バルンスが蘇門答臘の田舎をめぐってある其の
田舎をめぐりて其の心を都の指を
うしろ上るを其の田舎をめぐりて其の心を
其の快と謂はるるを得る。日よひ

ハ田舎をめぐりて其の心を都の指を
手鞠をめぐりて其の心を都の指を
ニス。田舎をめぐりて其の心を都の指を
人。田舎をめぐりて其の心を都の指を
茶。田舎をめぐりて其の心を都の指を
カ。田舎をめぐりて其の心を都の指を
月。田舎をめぐりて其の心を都の指を
○ドライデン。田舎をめぐりて其の心を都の指を
池。田舎をめぐりて其の心を都の指を
を。田舎をめぐりて其の心を都の指を
つ。田舎をめぐりて其の心を都の指を

のきんを大徳人ひある、セーリスピヤの法心
を法是増持しんまのさう供したふる
とも極意あり也此の法心を満直し
しものさうま上るせれすまもよく似
てる、あうしーバルンスの方う遠なる大
くま人ひあることを固くことに較べん
とくま

○ポーゾうる練千鍛あ向の推敵ひう
きめを審しんるまをまきまらるひ属めあ
まひある而しん其の為人と正直心夫
夫をつくりあひある



○テニソンを以るるはまの比たんはブラウ
ニングを露付ひある、而し其の作の晦
淡してまもいうま、らうまき故す
や熟字を用ゆるまをまらるま森持あ
ははるまき敷、ブラウニングの法をセーリ
スピヤのを法さうま、遠なる而極ま
まの法此の法人の法中、~~早く彼の作~~
の法を法ひるま、~~早く彼の作~~
ま、出てるま、又ブラウニング研定合
もまらるま起んま
○遠なるの法さうま、
ほゆるまもまじい

スコットのブライド、ラスマーミアアを
評し此の公あつて春窓綺談を著る名をつけ
た、此の時分●ツトンのマルトウウィルスを評し
此の時分あつて、きんを春窓キナ不抄ふ者名
う附てんとあつて、ひとく此の文評や説う
行つんとあつてあつて、きんは好ゆえ文籍を
春の字を用ひて春は奇縁の事春窓綺談
のと同じ抄ふ名を合しといふある、此の時
分綺縁を馬琴の風系著るを評し此…
えんを丸養び出版せんと、此の時分好ゆ
まさら自分名を出す可なりと云ふ評

東洋書製

道文を合の橋健三の名を出志れん此
のちおもくを撰しそを完りて午入ら
るい、此…著るを記懐しんそる人かを
い位かろう
以上を大いなる花を中…の作であるが、著り
業して後出し此一考文加の…の例の
中女吉生を著る…ひある、これら本は妻
正改の晩年を…と云ふ著る…出版
さしてある…と云ふ…と云ふ…と云ふ…
…と云ふ…と云ふ…と云ふ…と云ふ…
の晩年を…と云ふ…と云ふ…と云ふ…と云ふ…

〇このごろ好ゆえにぬを誇りて天つとことび
あつたはゆかきこそ三経の神書と云
ひんそそくしあつた、そんを何んかとい
えとえんは

一 輪軸

毛織子ひ羊羔毛をさうた
この、いんちや中し印をさうた
つぎ扱くお供をしこの

一 朝鮮一扇

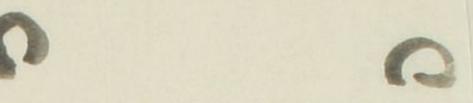
尺牘の桐油を染むつけに扱
ふこの、とんちやふ原の扇の扱



おと同じく武蔵橋を行た
うぬさうた扱 浮由浸染
の掃なうさつちをえんを扱
を廻りしと

一 者扱入カバン

いんちやかき隠を主流ふカ
バンにあつたのが、いんち
と同じくさう扱く、去年
お供をさうさうた、雨霞
さうさうた、さうさうた、
ワビさうさうた、さうさうた



○此移門友あり。其その味を七座と食
 との別なたうと滑つたをいふがとんを研詰
 七ゲーテがは味をトルースとアント
 ルースの Twilight の味をいふと滑つた
 其同一の味を東西の名人を於ていふ同一
 トことを滑つてゐる
 ○或る人も移門の書人の作の中をいふと



男は口説きいけることか得る又けるがあひを
 筆も不情とせしと餘りあつていふこと
 するは、其その情を女の方から其人のあひを
 其その情を男の先生と女の先生とを
 うりやうとすることとあつて、一歩きのあつた
 柄の足さうと、そのまをいふこと
 体其その目的を、観るは、感動と共にいふ
 こととあつて、女は口説きいふやう男は
 口説き出さうが、感動と共にいふやう
 いかもあつて、其その一七字と、同トと
 九のうんと、其その一七字と、同トと

の混ざるまじり即ち芝居と実流の異を
此と謂つた。此の如く流の意はさうい
ふもの物の流の如くひまもあつたを
役者もさういふまじり人死ぶ者のひま
世の不振も流動といふも流動を興ふ
たるん不自然さうさう女の人の死死に流動せ
ば流動の流をみささるゝを得
さうつれのひまさう、流物さうさう人死ぶ賦
しとそらなりしを一向人傳う移らさういひあ
らうと

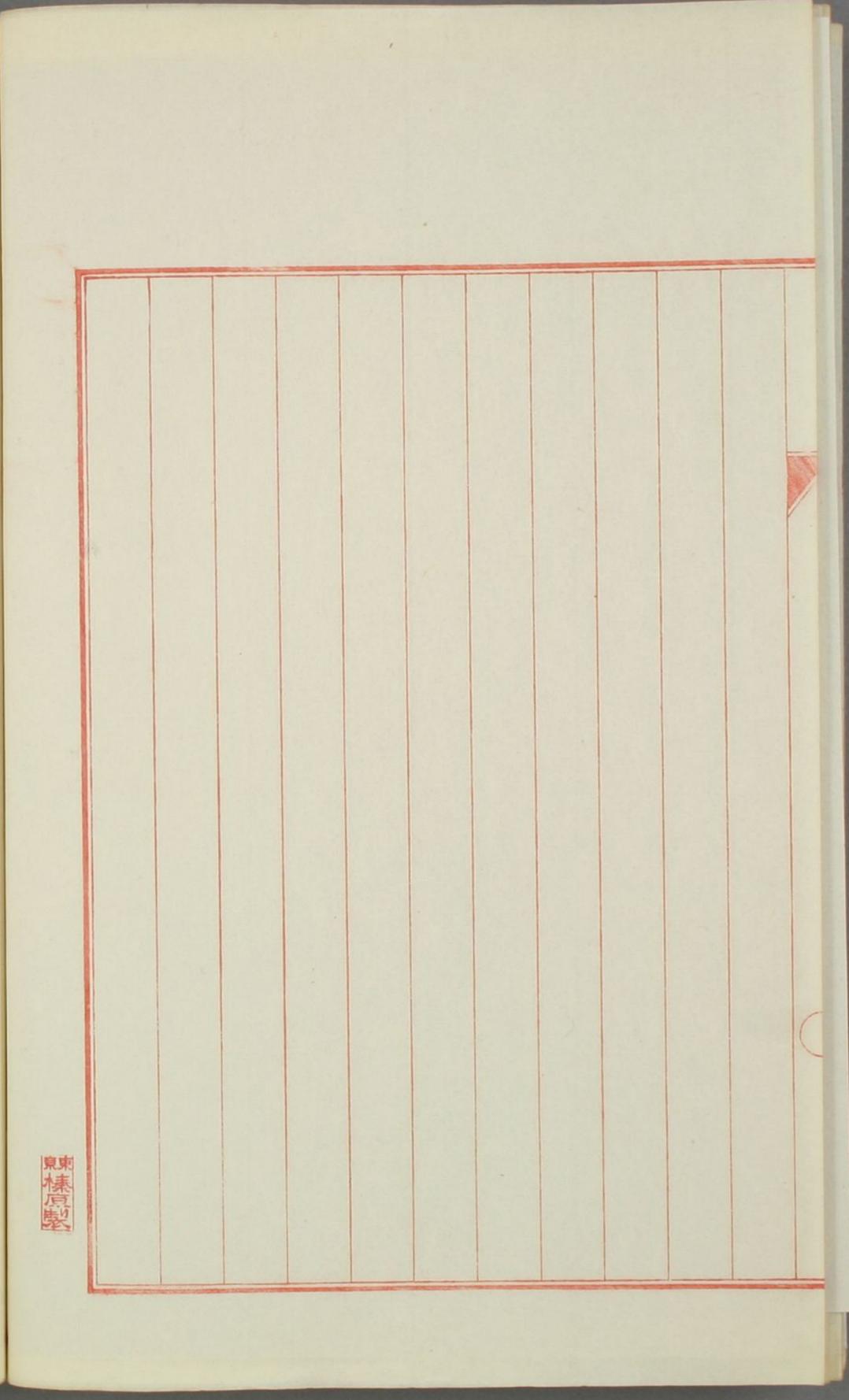
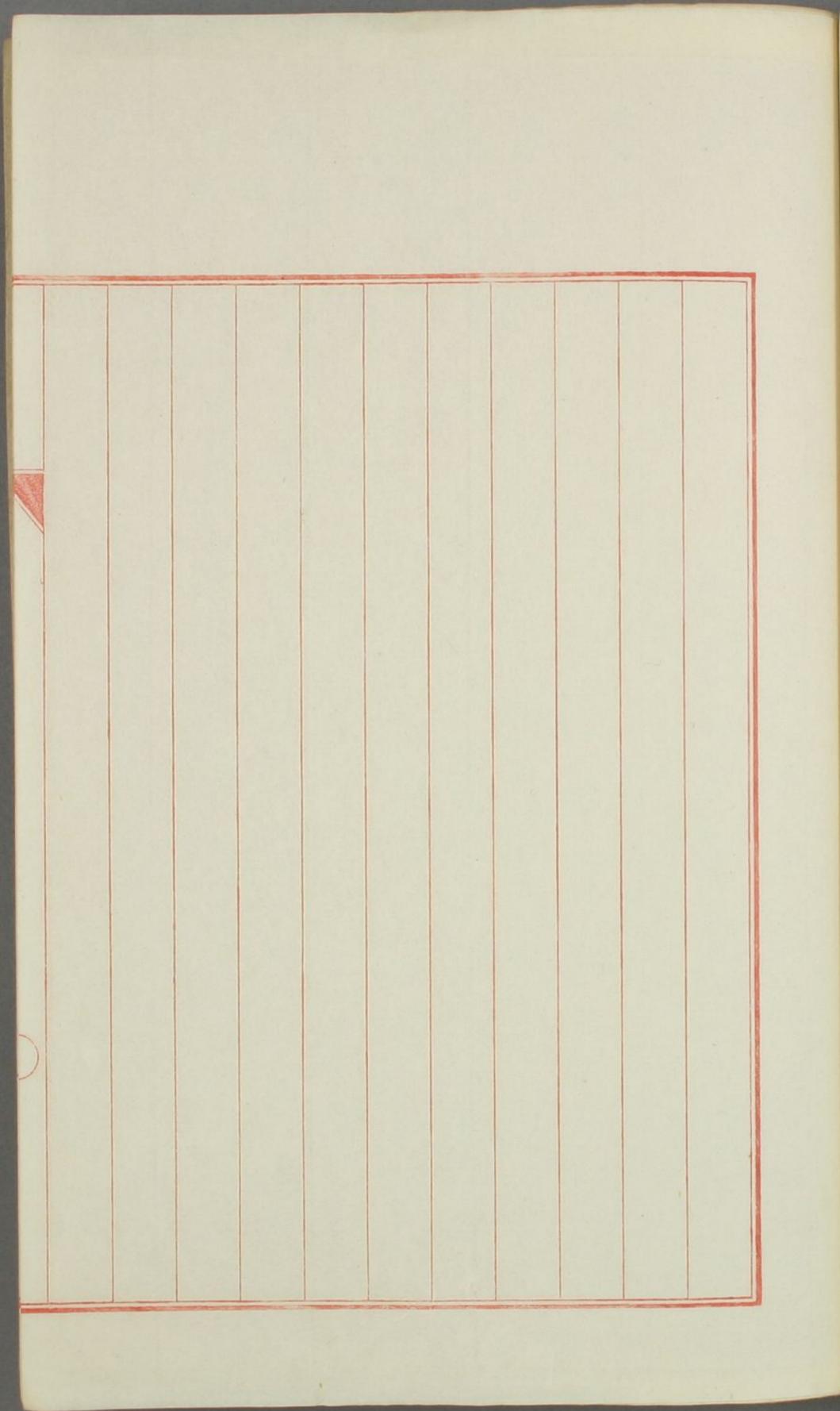
わさうい

○余もさきよの間に思ひてうらを連言暇え
ぬいさふまゝさうかか、そんまらきまの目巧いこと
おきりいつくう子、あつて思ひて、床ふさこみつて
そのうに存まふいかりうく存へてなるゆゑ、自分
まゝさうかきくまひの神、うたをて頭胞うき
ぬいさふ、妙極うらまゝとさううく巧い工夫

陳様

うつくぬ、一例をるけしと僕の涙刻脚
ぬいさふまゝさうかか、そんまらきまの目巧いこと
おきりいつくう子、あつて思ひて、床ふさこみつて
そのうに存まふいかりうく存へてなるゆゑ、自分
まゝさうかきくまひの神、うたをて頭胞うき
ぬいさふ、妙極うらまゝとさううく巧い工夫

うあるのち中々おぼろげなことをいふ出づるのい
ナニのつたをとり、僕と親、如の暗いとい
あつたのいふ戸を明け放し、書く日、一
書ぬき、いふと各自のテム、ヘラメント、い
ふ、陰影、いふ、いふ、いふ、日、真、黒、い
一、テーンをいふ、いふ、いふ、いふ、いふ、い
いふ



東林堂製

以下全て
白紙

明
治
三
十
七
年
二
月
上
浣
熱
海
客
中
春
城
山
人